

そとぼり通信No.37

雑誌名	日本文学誌要
巻	61
ページ	111-116
発行年	2000-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020112

通信 そとぼり

No. 37

押して駄目なら引いてみな。引いて駄目なら、また押してみな。

卒論での問題意識を育て、恐れずポレミックな論文を！ 期待している。

若うどさわに旅立つ日、逍遊老人の曰く／旅寝してうき世を知れや水ぬるむ

「人を潤す者は自分も潤される」(『旧約聖書』箴言から)

自分とはちがった個性をもつ人を敬遠せず、怖がらず、手を差し出していたきたい。

卒業おめでとう。月並だけど、人、事、物へのときめきを忘れないでほしい。

他者との関係を大切にし、いつまでも遠くを見つめる心を失わないでください。

まなこ閉ぢて われは歌はむ みんなみの ダンデュカリユシ そのひとふしを

自分はこう生きてきたという一すじの道を作っていつてほしい。

小笠原賢二

熊野 健一

甲 辰 春

関口 安義

高橋 順子

田中 益三

長谷川 啓

濱田 弘美

前田 角蔵

小笠原ゼミ

李 均一

小笠原ゼミ

田畑風音

切磋琢磨

大学において、最も有意義に過ごしたのはゼミの時間であつたかもしれない。文芸創作の面白さ、難しさ、楽しさ、辛さを多く味わうことができました。小笠原先生は厳しい人でした。ですがその真剣な姿勢にゼミ生は多く影響を受けていました。互いの批評も決して手を抜くことなく、むしろ厳しく批評することがさらなる成長の糧となることを、小笠原先生はいつも話していらつしました。そのためゼミでは、毎

週のように齒に衣を着せぬ批評が行われていました。そうした真剣な叩き合いの中で、多くのゼミ生は着実に実力を伸ばしていたと思います。ゼミで過ごした日々を、僕は当分忘れられないように思います。それほど刺激的で、多くのことを感じ、そして考えることができました。小笠原ゼミに入ることができて良かったと思います。ゼミ長として至らぬ点の多かった二年間でしたが、その二年間を一言で表現するとすれば、やはり「楽しかった」の一言です。

わたくしのやうに不出来な学生にとつて、ゼミといふ場はいつも生きた心地がしなひものでござひました。皆様の賢さや能弁さの前でつたない意見を述べる恐ろしいこと恥づかしひこと。それでも三年間も居続けたのは（わたくしは三年生を二回やりました）、小笠原ゼミの自由な雰囲気があればこそでございます。

今となつてはあの恥づかしさも恐ろしさもすべて心地良ひ思ひ出となつております。梅崎春生「幻化」の発表のおり、皆が

頭を抱へた問ひを先生が見事に解き明かしてくださつた刹那の目から鱗が落ちるやうな感覚を、わたくしは生涯忘れ得なひでせう。誠に有り難ふござひました。多くの優秀な方々が、ゼミであのやうな感覚を得ることが出来ますやう願っております。それではこの辺りで失礼致します。さやうなら。

草々

熊野ゼミ

ゼミ卒業生一同

◆長い様で短かった四年間、いろいろ経験できました。もう学生ではいられないのが少し恐いですが、頑張ります。

◆振り返って見ると、短った四年間、これからは社会人として歩み出す糧として、活かしていきたい。

◆私なりに充実した大学生活を送れたと思います。お世話になった全ての皆様、本当にありがとうございます。

◆いろんなことを吸収できた四年間だったと思います。これからの人生に生かせて行

けたらなと思います。

◆編入生なので二年間という短い時間でしたが、法政での大学生活は良い思い出になりそうです。

◆勉強と部活とどちらが重かったかわからない生活でしたが、大学生活で学んだ多くのことは全て私の力になりました。

◆三年間ゼミで一つのことを学べたことはいい経験になったと思います。たくさんのかことを吸収できました。

(大場・金・増山・太田・及川・戸叶・安高)

島本ゼミ

ゼミ卒業生一同

◆ゼミにおいても、社会に出て、やりたいことをやるということは大切なことです。しかし、組織と呼ばれる人の集合体も大切です。簡単にいうと、自分にとって楽しい組織の中なら、多少やりたくないこともがんばれます。逆に居心地の悪い組織の中では、自分のやりたいことですら満足にできないのではないのでしょうか。僕はこのゼミの中で、よき人達に恵まれたことに大変感謝しています。

◆卒論を書いていた時にもっと勉強していれば良かったと思いました。

◆松尾芭蕉についてもっと知りたくなりました。

◆松尾芭蕉の作品を研究して、深く理解し

たくなりました。

◆人並、人並以上、人並以下、そのどれにあっても面倒くさいものです。

◆俗悪な現実主義と空虚な理想とに分裂しないよう、のらりくらりと行くだらう。

◆これからも、「出会い」「別れ」を大切に、自分なりのおくのはそ道を発見していきたい。松尾芭蕉の研究は、これで終わりではないので、機会をつくり、いろいろと研究していきたいです。

三年間ありがとうございました。

(山村・尾崎・菅野・藤井・安倍・山崎・吉野)

関口ゼミ

深澤岳大

高橋ゼミ

ゼミ卒業生一同

コンペイトウ学生論

以前、何かの本で読んだ文章を覚えてい
る。「大学生はコンペイトウであれ」と。

コンペイトウには承知の通り、イガイガ
がある。大学生も、学生時代は自分の意見
や、夢や、希望や、その他様々なことにイ
ガイガと自分らしくあり、イガイガでもつ
て世間に存在をアピールしていかなければ
ならない。また、四方八方にアンテナを張
りめぐらしていなくてはならない。コンペ
イトウがそうであるように。要するに無気

力・無目的・無感動になるな、丸く、小さ
くまとまるな、ということだろう。

社会に出るときでも、イガイガを削る必
要はない。とりあえず砂糖でもまぶしてお
けば見た目には丸くなる。砂糖でくるんだ
下に、いつまでも自分らしさのイガイガを
持ち続けていればよいのだ。ちよつと体を
はたいて砂糖を落とせばまたイガイガは現
れるのだから。そのイガイガをどれだけ大
きく、広く張りめぐらすか。それで学生時
代の価値は決まるのである。

◆なごやかな空気のととても楽しいゼミでし
た。みんな、先生、ありがとうございますし
た。

◆最初は個性の強い仲間ばかりで戸惑いま
したが、仲良くやれて楽しかったです。興石
◆群馬から通った価値がありました。良い
仲間、先生と出会えたから。本当に、感謝。
◆ゼミでは心の豊かになる時間を過ごせま
した。ありがとうございました。

◆突進するしかない僕に、先生はおだやか
な時を与えてくれました。感謝しています。

◆自由な時間を有難うございました。これ
からも何か書いていきたいです。

◆ゼミで過ごした時間は何ものにもかえが
たいなあ、本当に楽しかったです。

◆どんな紅茶もおいしく飲めます。コッ
つかめばよいですよ。ねえ、先生？

◆人は群れると異常になるが、良い方向に
向かうのは一人ずつでしかない、ですね。

(遠藤・興石・吉井・本多・角野・野口・柳
井・鈴木・高取)

田中ゼミ

宮崎楠緒子
&
藤枝武志
&
佐藤寛一

長谷川ゼミ

高木大成

◆応援団が好きだった。スポーツの季節に行われる他大との応援交換、響く校歌に魅かれて前庭に駆けつけた。力一杯の応援が実に楽しい。愛校心を持つて素晴らしい。六大学野球観戦、騒ぎ過ぎて時計のベルト千切れた。喉が哽れた。愛校心に万歳。卒業を目前にした私の最後の目標は卒業式、武道館アリーナ席で大声で校歌を歌うこと。

◆旅行、メール交換、語学の習得、韓国料理店と塾と野球場でのアルバイト、阿川弘之、六大学野球、女の子、サークルそして

新聞記者になる夢……。学生時代いくつのことに熱中しただろうか。一目惚れ主義者の名に恥じぬ実績がある。だが惜しむらくはもう少し文学に恋したかった。今、卒業を前に一番思うのはこのことである。

◆小説を読む楽しみ。それがいかに学ぶということにつながってゆくか。それを教えて下さるのが、田中先生の講義です。

一冊の本。それを前から横から、ななめから。本を読むことは、脳に汗をかくことと同義です。

あーあ、みんながそんな面倒臭いっていうから

……、誰が読むの？

一食の味噌ラーメンはうまい。それもヌシが作るやつはホントにうまい。ヌシってのは、一食を牛耳っている（違う？）あの人のこと。ほら、サザエさんパーマで、あき竹城に似た……。ふてぶてしい顔（失礼）ながらも、チャッチャと手際良く麺を茹でる姿はまさに職人。麺もベストアルデンテ！（それはスパゲティ）って感じ。ヌシ

が麺コーナーにいる時はちょっと得した気分になる。そうそう、もう一人、職人と呼ぶにふさわしい方がおりました。どんなに混んでいても淡々とコロッケを切る二食揚げ物担当のおじちゃん。その動きはちよつとしたからくり人形。たまに動きが止まったりして、ゼンマイ切れたかしらん？なんてつい思ってしまう。二食はこじやれた店に模様替えしたそうですが、おじちゃん、どうしてですか。

浜田ゼミ

松原公恵
&
鶴本弘美

前田ゼミ

佐々木和子

◆大学での四年間、特にゼミでの二年間、

私達は、天野先生、浜田先生、先輩、後輩と様々な方に支えられて、沢山のことを学んだ。勉強や遊びはもちろんのこと、人間としてという最も大切なことを教えて頂いた今、感謝の念に堪えない。しかし、それは言葉で表現するだけでなく、法大卒業生として、社会人として、何よりも人として立派に成長することが、お世話になった方々への恩返しになるのだ、との思いを胸に前進していこうと思う。

◆「よき師 よき友 つどひ結べり」

「進取の気象、質実の風」

ゼミの天野先生、浜田先生を始め、諸先生方には多大なる御指導を賜わり、感謝の思いは筆舌に尽くせない。そして、多くの素晴らしい友と出会い、私も、自分らしく輝いて生きていきたい、との感を強くした。私は、「法政大学校歌」を胸に、充実した学生生活を過ごせたことを誇りに思っている。そして、これからの私も……。

ゼミの思い出

二〇〇〇年三月二十四日は私達の卒業式だ。「去年今年貫く棒のごときもの」などと口ずさんで見ても、やはりいつにも増して晴れがましい気分である。振り返ると様々な事が頭に浮かぶ。中でも心に残るのはゼミのことだ。恥ずかしい話であるが、ついに行くことで精一杯の二年間であった。殊に今年のゼミは皆に積極的に発言してもらおうと試みたため、時には辛く、足が遠のく日もあった。いつも尤もらしい事を言わ

なくてはと気負い過ぎてゼミが考えるきっかけや材料を得る所でもあるという事を忘れていた。そんな時の前田先生の「積極的に恥をかきなさい。」という言葉はとても強く残っている。自分の未熟さをはじなければ成長出来ない事がわかっていながら、意気地がなくて出来ずにいた。前田先生のこの言葉は大学生活において最も大きな収穫の一つであった。時に辞めようと思った大学生生活であるが、今は充実した気持ち一杯で卒業を向かえようとしている。